

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

北海道公衆衛生学雑誌 (2016.3) 29(2):115-121.

熟練保健師が語る保健師活動の継承～北海道A地区におけるグループインタビューから～

塩川 幸子, 藤井 智子, 北村 久美子, 石谷 絵里, 岩本 泉

## 熟練保健師が語る保健師活動の継承

～北海道A地区におけるグループインタビューから～

塩川 幸子<sup>1)</sup>, 藤井 智子<sup>1)</sup>, 北村久美子<sup>2)</sup>, 石谷 絵里<sup>3)</sup>, 岩本 泉<sup>4)</sup>

## 要 約

近年、分散配置や熟練保健師の退職等により、保健師活動の継承が課題と指摘されている。本研究は熟練保健師が先輩から受け継ぎ、後輩に引き継いでいきたいことを明らかにすることを目的とした。A保健所管内の市町村および保健所に勤務する熟練保健師を対象にグループインタビューを行い、逐語録を質的に分析した。対象者は8名、保健師経験年数は平均28.1年であった。分析の結果、6カテゴリーを生成した。熟練保健師は次世代の保健師に継承したいこととして、【保健師活動の原点を考え続ける】なかで【活動を積み重ねながら専門性を確かなものにしていく】ことを大切にしてほしいと考えていた。また、【これだけは残してほしい保健師魂】を語った。継承のための環境として【育ち合う基盤となるもの】、【経験を分かち合う風土】、【活動を継承する仕組みづくり】を挙げ、継承のためには、保健師活動の歴史を形として残していくことの意義も示唆された。

キーワード：熟練保健師，継承，専門性

## 1. 緒 言

保健師活動は社会情勢や法律の変化に伴い体制が変化しながらも引き継がれてきた。しかし、近年、その継承が課題であると指摘されている。

1994年地域保健法制定により、住民サービスは保健所

から身近な市町村へシフトされ、法律や体制の変化により保健師の分散配置が進んだ<sup>1)</sup>。また、団塊世代の熟練保健師が大量に退職する時期を迎えた保健師2007年問題を機に保健師活動の継承の困難さはさらに注目された<sup>2)</sup>。

湯浅ら<sup>3)</sup>は時代の変化の中で保健師が認識している現状として、制度変化に伴う保健師業務の負担増加、業務別分散配置等により地域全体を捉えることの困難さを問題提起した。2013年改訂の保健師活動指針<sup>4)</sup>において、人材育成と統括保健師の配置の必要性が明記された。分散配置を統括する統括保健師の役割として、部門を越えた連携と職能の根幹に関わる共通認識の醸成を意識した場の設定が必要<sup>5)</sup>とされる。しかし、2014年度保健師活動領域調査<sup>6)</sup>において、組織横断的に調整や人材育成を行う統括保健師は6.1%にとどまり、未だ体制整備の課題は大きい。

このような時代の変化に伴う保健師活動の継承に関する研究として、へき地における戦後から高度経済成長期までの保健活動の技術に関する研究<sup>7)</sup>や先駆的な活動を展開した保健師のライフヒストリー研究<sup>8)</sup>、健康問題の解明に焦点を当てた保健師活動の手記等の分析<sup>9)</sup>等がみられる。川崎らの沖縄県駐在保健婦経験者への調査<sup>10)</sup>では今後継承すべき能力として個別支援と地域診断の重要性を挙げた。このように保健師の経験知から技術の見える化や、継承につなげるための研究がみられる。

これらのことから、時代の流れやその地域に即した保健師活動の継承のための具体的な方策については検討を継続していく必要がある。特に、法改正や市町村合併等の激動の時代であった昭和から平成にかけて活動を中心的に担ってきた熟練保健師の語りから継承すべき保健師活動のコアを探求し、継承の方法を探ることの意義は大きいと考える。

本研究は、北海道においてリーダー的役割を担う熟練保健師が先輩から受け継ぎ、後輩に引き継いでいきたいことを明らかにすることを目的とした。熟練保健師自身の継承体験をとおして、保健師活動の継承のあり方に対する示唆を得る。

1) 旭川医科大学医学部看護学科  
2) 元旭川医科大学医学部看護学科  
3) 北海道オホーツク総合振興局保健環境部紋別地域保健室  
4) 北海道後志総合振興局保健環境部保健行政室  
連絡先：塩川 幸子  
〒078-8510 北海道旭川市緑が丘東2条1  
丁目1番1号  
旭川医科大学医学部看護学科  
T E L : 0166-68-2953  
F A X : 0166-68-2953  
E-mail : shio32@asahikawa-med.ac.jp

## II 対象と方法

### 1 対象

北海道内のA保健所管内の保健所および市町村に勤務し、看護職の総経験が20年以上で、そのうち保健師経験15年以上、係長職以上の熟練保健師8名を対象とした。対象の選定は、機縁法により現任教育に力を入れている保健所管内を選定し、研究者から対象者へ研究主旨や内容等を説明し、協力の同意が得られた者を対象とした。

### 2 方法

研究期間は2013年12月、場所はA保健センターを借用した。保健師経験15年以上の公衆衛生看護学の教育研究者(第一著者)が現地に出向き、ファシリテーターとして調査を実施した。

研究デザインは質的記述的研究とし、「保健師活動の継承」をテーマとして約120分のグループインタビューを行った。インタビュー内容は、対象者の承諾を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

本研究においてグループインタビューを選定した理由として、安梅<sup>11)</sup>は生の声を体系的に整理でき、グループでの意見構築、相互作用による意見の引き出し、客観性保持、科学性が高いとしており、本研究の目的である継承を明らかにしていくために適した方法と考えた。

### 3 調査内容

研究協力者の属性として、年齢、性別、保健師経験年数、現在の職位、職歴・異動歴や主な活動経過等を事前に把握した。当日は、インタビューガイドに基づき、①自身の保健師活動を振り返り先輩から受け継いだこと、②後輩に引き継ごうとしてきたこと、③継承のために必要なこと、④保健師活動のやりがい等を主な聞き取り内容とした。

### 4 分析方法

分析方法は、質的研究<sup>12) 13)</sup>の分析手順を参考とした。逐語録を精読し、インタビューの中で保健師活動の継承を表す発言について文脈を切らないようデータを抽出し、データの意味を要約してコード化した。コードの意味内容が類似するものをまとめ、先輩が後輩保健師に活動を継承していくための視点やプロセスを意識して、サブカテゴリーを生成した。サブカテゴリーとカテゴリーを相互に関係づけて分析し、包括的な意味を持つカテゴリーを生成した。さらに、生成されたカテゴリーの関係性からストーリーラインを記述した。

なお、分析は、複数の公衆衛生看護学の教育研究者と現職の熟練保健師で行い、カテゴリーの内容や分類について繰り返し検討した。カテゴリーは、メンバーチェックとして研究協力者2名に確認を得て、語りの内容

の反映、納得できる命名であるかの意見をもらい、研究者間でさらに検討を重ねて信憑性の確保に努めた。

### 5 用語の定義

(1) 本研究において「継承」とは、昭和後期から平成の現代の時期において、先輩保健師から活動を受け継ぎ、自らも実践を重ね、共に働く後輩である次世代の保健師に活動を引き継いでいくことと定義する。

(2) 本研究では「熟練保健師」を、看護職の総経験が20年以上でそのうち保健師経験15年以上、現在、市町村または保健所に勤務する行政保健師で係長職以上の者とする。なお、北海道では、2006年北海道保健師活動指針<sup>14)</sup>に基づき「北海道保健師現任教育マニュアル」を作成し、保健師経験年数11年以上を後期中堅とし、年数によらず係長職以上の者を管理期としている。

### 6 倫理的配慮

対象者に対して、研究目的と方法、研究参加の自由意志、匿名性の確保、結果の公表等について文書及び口頭で説明し、同意書により承諾を得た。なお、本研究は旭川医科大学倫理委員会の承認を受けて実施した(承認番号1632, 2013年11月26日承認)。

## III 結果

### 1 対象者の概要

対象者は8名(女性7名, 男性1名)で、年齢は平均53.1歳であった。保健師経験年数は17~35年(平均28.1年)で、8名中4名に看護師の職歴があり、看護職としての総経験は20~37年(平均29.3年)であった。職位は、参事1名, 主幹5名, 主査2名であった(表1)。

### 2 分析結果

分析の結果、保健師活動の継承を表す内容として34サブカテゴリー、6カテゴリーが生成された(表2)。カテゴリーを用いて結果の概要を述べる。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〔〕、コードを*斜体文字*で示す。

熟練保健師は、次世代の保健師に継承したいこととして、【保健師活動の原点を考え続ける】なかで【活動を積み重ねながら専門性を確かなものにしていく】ことを大切にしたいと考えていた。また、【これだけは残してほしい保健師魂】として引き継ぎたい活動を挙げた。さらに、継承のための環境として、個人が持つ【育ち合う基盤となるもの】、職場における【経験を分かち合う風土】、【活動を継承する仕組みづくり】をシステムとして機能させていくことの重要性が挙げられた。

次に、カテゴリーごとに説明していく。

#### 1) 保健師活動の原点を考え続ける

熟練保健師は、保健師活動を継承していくためには、

表1 対象者の概要

対象	性別	年齢	保健師 経験年数	看護師 経験年数	看護職の 総経験	所属（配置部署）	職位
A	女性	50歳代	35年	2年	37年	市町村（保健・福祉兼務）	参事
B	女性	50歳代	30年	—	30年	市町村（保健）	主幹
C	女性	50歳代	25年	3年	28年	市町村（保健）	主幹
D	女性	50歳代	31年	—	31年	市町村（保健）	主幹
E	女性	50歳代	29年	—	29年	市町村（保健・福祉兼務）	主幹
F	女性	50歳代	30年	1年	31年	市町村（保健・福祉兼務）	主幹
G	男性	50歳代	17年	3年	20年	保健所（企画調整部門）	主査
H	女性	50歳代	28年	—	28年	保健所（保健）	主査

表2 保健師活動の継承の内容と方法

	カテゴリー - (6)	サブカテゴリー (34)
1	保健師活動の原点を考え続ける	保健師とは何か原点を考え続ける 多様化する地域で保健師に何が求められているかを考える 他職種との協働の中で保健師の立ち位置を考える 保健師の特性や強みの自覚と自負を持つ
2	活動を積み重ねながら専門性を確かなものにしていく	住民一人ひとりの健康を長いスパンで見守る 予防的な視点から住民や関係者と一緒に課題を解決していく 健康を入り口に人々や地域全体を見る 医療的判断と緊急性や優先性の判断 生活の中で住民のセルフケア力を高める看護技術の活用 同じ問題を持つ人同士をつなげ、支え合う関係を作る 個から集団に関わりを広げながら地域づくりにつなげる サービスの隙間を埋めて臨機応変に動く 住民の健康を支えるために必要な資源を作っていく
3	これだけは残してほしい保健師魂	現場に出向く地区活動を大切に手放さない 地域に埋もれたケアの必要な人に目を向ける 一人ひとりと生活の場で丁寧に向き合う 住民の健康を守るため黒子となり代弁者となる 相談しやすい身近な存在となる 人々の思いを汲み取り突き動かされる感性と行動力 地域への愛着と責任を持ち続ける
4	育ち合う基盤となるもの	色々な人に育てられた実感が人を育てる 存在感のある先輩の活動から学ぶ 後輩への影響力を自覚し活動展開のモデルとなる 後輩から刺激をもらい学び続ける
5	経験を分かち合う風土	一緒に活動して見せていく ものの見方を語り合い共有する 意味づけを深めるための問いかけ 保健師の専門性が理解される職場の風土
6	活動を継承する仕組みづくり	活動について話し合う場を意識的に作る 経験年数や力量に合わせた課題を任せて見守る 力をつけていくプロセスで配置転換を生かす 統括的な役割を持つ保健師を職場の中に位置づける 市町村と保健所と一緒に活動の継承に取り組む 保健師活動の歴史を形として残していく

保健師一人ひとりが自分の活動を振り返り、【保健師活動の原点を考え続ける】ことが重要と考え、原点を考え続けるための視点を挙げた。保健師として活動して何年経っても【保健師とは何か原点を考え続ける】ことが重要と述べた。さらに、〔多様化する地域で保健師に何が

求められているかを考える〕ことや、地域で活動する〔他職種との協働の中で保健師の立ち位置を考える〕ことが原点を考え続けることになり、〔保健師の特性や強みの自覚と自負を持つ〕ことにつながると語った。

## 2) 活動を積み重ねながら専門性を確かなものにしていく

熟練保健師自身が【活動を積み重ねながら専門性を確かなものにしていく】プロセスを振り返り、次世代の保健師にどのような活動を積み重ねることが専門性の確立につながっていくのかを示した。熟練保健師は、活動の中で〔住民一人ひとりの健康を長いスパンで見守る〕ことを意識し、〔予防的な視点から住民や関係者と一緒に課題を解決していく〕姿勢や〔健康を入り口に人々や地域全体を見る〕ことを積み重ねることが公衆衛生看護の特徴と語った。保健師は〔医療的判断と緊急性や優先性の判断〕が様々な場面で求められ、家庭訪問により〔生活の中で住民のセルフケア力を高める看護技術の活用〕をして、支援していく役割がある。さらに、〔同じ問題を持つ人同士をつなげ、支え合う関係を作る〕こと、〔個から集団に関わりを広げながら地域づくりにつなげる〕という活動展開を意図的に行い、『地域の中で個別支援をしながら、個別支援だけに終始しないのが専門性』と語った。

住民の健康を守るために〔サービスの隙間を埋めて臨機応変に動く〕ことを重視し、熟練保健師は、『対象者の満足や公平な支援、サービスの隙間でこぼれ落ちる人をどうしたら救えるか考え、対応策を広げていくことが大事』と述べた。また、〔住民の健康を支えるために必要な資源を作っていく〕という施策化の役割を担うことも保健師の専門性と強調した。

## 3) これだけは残してほしい保健師魂

熟練保健師は時代が変わっても【これだけは残してほしい保健師魂】を語った。特に、〔現場に出向く地区活動を大切にしてお手放さない〕ことを強調した。〔地域に埋もれたケアの必要な人に目を向ける〕ことを挙げ、『地域に潜在している自ら助けを求めることができない人にも保健師は目を向け、関わる責任がある』と述べた。家庭訪問をとおして〔一人ひとりと生活の場で丁寧に向き合う〕ことを挙げた。熟練保健師が新人の頃、『訪問の目的は何か?と言うと、先輩から目的がないと動けないのかい?まず行ってごらんと訪問に送り出された。それは、出向いて生活を見てくることの意義、行ってわかることもたくさんあると伝えたかったのだと思う』と振り返り語った。

熟練保健師は〔住民の健康を守るため黒子となり代弁者となる〕役割を担うこと、〔相談しやすい身近な存在となる〕ことが〔人々の思いを汲み取り突き動かされる感性と行動力〕を育てると語った。そして、〔地域への愛着と責任を持ち続ける〕ことを期待していた。熟練保健師達の願いは、『住民とともにあり、住民に愛される保健師なってほしい』ということであった。

## 4) 育ち合う基盤となるもの

熟練保健師が考える【育ち合う基盤となるもの】として、〔色々な人に育てられた実感が人を育てる〕と感じており、『住民に育ててもらった』と口々に語った。また、〔存在感のある先輩の活動から学ぶ〕という体験をとおして、『先輩から引き継いだ保健計画は自分が退職した後も次の世代に残っていくと思う』と語り、次世代に継承していた。ベテランになると自分の〔後輩への影響力を自覚し活動展開のモデルとなる〕ことを意識する必要を感じ、『継承は上から下にする訳ではない』と語り、〔後輩から刺激をもらい学び続ける〕という相互関係を大事にしていた。

## 5) 経験を分かち合う風土

熟練保健師は【経験を分かち合う風土】として、『新人が入るととにかく自分が行くところに連れて歩いて一緒にやる』というように日頃から現場を共有して〔一緒に活動して見せていく〕ことや、訪問後に係内で訪問の振り返りをするなど〔ものの見方を語り合い共有する〕ことを挙げた。後輩の相談に乗る時には〔意味づけを深めるための問いかけ〕を行い、『後輩が自分で場面の意味を考えることができるようサポートする』ことが重要とした。

さらに、〔保健師の専門性が理解される職場の風土〕の重要性を挙げ、『事務職との連携は不可欠で、所内全体で保健師活動が認知されることや、保健師がいなければ困ると頼りにされる存在であることが活動のしやすさの秘訣』と考えていた。

## 6) 活動を継承する仕組みづくり

熟練保健師は、【活動を継承する仕組みづくり】として、〔活動について話し合う場を意識的に作る〕ことで活動目的の共有に努めていた。また、〔経験年数や力量に合わせた課題を任せて見守る〕、〔力をつけていくプロセスで配置転換を生かす〕ことで力量より少し上の課題を与え、次のステップへと導き見守っていた。さらに、〔統一的な役割を持つ保健師を職場の中に位置づける〕ことを今後の課題に挙げた。〔市町村と保健所が一緒に活動の継承に取り組む〕ことの意義について、『分散配置が進む中で保健所と市町村のつながりが薄くなっている。しかし、同じ地区を違う立場で受け持つ市町村と保健所の保健師が活動する意味を捉えることが大事』と語った。そして、〔保健師活動の歴史を形として残していく〕ことの重要性を挙げ、『保健師ですと言うと家に入れてもらえるのは先輩の功績で地域に受け入れてもらっている歴史的職種。訪問が減っており、保健師と言ってもわかってもらえなくなるのではないかと警鐘を鳴らした。また、『書類は保管年限で廃棄になるが住民の健康デー

タを経年的に見ていかなければ活動の成果は見えなくなる』と述べ、記録が捨てられてしまうことで活動が継承されなくなることを危惧していた。

#### IV 考察

##### 1 熟練保健師が経験をとおして次世代に継承したいコア

本研究では、熟練保健師自身が活動の中でどのように専門性を培ってきたのかを振り返り、そこから次世代の保健師に継承したいコアについて明らかにすることができた。

熟練保健師は【保健師活動の原点を考え続ける】ことを大事に自問自答しながら活動し、専門性を見出してきた経験から、次世代の保健師が原点を考え続けていくための視点を示唆したのである。熟練保健師は平成の市町村合併や分散配置を経験し、〔他職種との協働の中で保健師の立ち位置を考える〕ことで保健師とは何かを模索し、様々な場面で〔医療的判断と緊急性や優先性の判断〕が求められる経験をしていた。これらのことから、保健師は医療職であり看護職であることを意識して専門性を発揮することの必要性を示した。名原は、他職種が地域で活動するようになり、看護に基礎を置く保健師に求められる専門性の追求がますます必要<sup>15)</sup>と述べており、保健師の立ち位置の構築と専門職としての役割を所内外に見せていく必要が高まっていると考える。

さらに、【活動を積み重ねながら専門性を確かなものにしていく】ための様々な経験の内容や視点が明らかになった。すなわち、経験から学び、自らの手でコアとなるものをつかみ、活動をしながら保健師として成長していくということが示された。〔健康を入り口に人々や地域全体を見る〕という視点を持ち〔個から集団に関わりを広げながら地域づくりにつなげる〕という活動はまさに保健師の専門性である。いつの時代においても、〔サービスの隙間を埋めて臨機応変に動く〕ことが保健師という自由度の高い職業<sup>16)</sup>の特権でもあり、住民の困り事に寄り添い、地域に無いサービスがあればどうすればいいか地域全体で考えていくという公共性の高い思考で活動していくことの重要性が示唆された。

次に、【これだけは残してほしい保健師魂】について述べる。保健師魂とは「何とかしたい」という熱い思いを示し、魂は活動の駆動力につながるとされる<sup>17)</sup>。すなわち、魂とはゆるぎない信念、職業観、姿勢を示している。本研究において、保健師としてこれだけはほしい、続けてほしい価値あることとして、〔現場に出向く地区活動を大切にしてお手放さない〕ことが挙げられた。熟練保健師は、住民と直接関わる家庭訪問や地域に根ざした活動により、〔人々の思いを汲み取り突き動かされる感

性と行動力〕は現場で磨かれると感じ、住民や関係者と一緒に課題解決していく姿勢を大切にしたいと考えていた。平野は、保健師らしい地区活動とは、人々の生活する地域に出向き、生活の中で人々の声を聞き日常性を共有し、今何が個人の問題であり地域の課題であるのかをつかむことと述べている<sup>18)</sup>。保健師活動の原点を考え続けながら、〔一人ひとりと生活の場で丁寧に向き合う〕関わりを基盤とし、地域に愛着を持って地区活動を積み重ねていくことが専門性の継承にもつながっていくと考えられる。

##### 2 保健師活動の歴史を引き継ぎ発展させていくための方策

保健師活動を継承していくための方策として、【育ち合う基盤となるもの】を大切にしながら、保健師個人の努力だけでなく、職場環境の中に【経験を分かち合う風土】を形成し、【活動を継承する仕組みづくり】を行いシステム化していくことが重要と考えられた。これらが土台となり、保健師としてのコアが構築されていくと考える。

本研究をとおし、育ち合う基盤として、〔色々な人に育てられた実感が人を育てる〕と語られており、住民から学ぶことは多い。また、職場では先輩後輩が互いに学び、他職種からも学んでいる。新任期保健師を対象とした研究<sup>19)</sup>では、課題解決の方法として職場の先輩に相談することが多く、相談しやすい環境と訪問前の励まし、聴く雰囲気や支えになると報告されている。先輩は関係性を大事にし、後輩への影響力を意識して学び合うこと、謙虚に学び続ける姿勢を持つことが大切である。

佐伯らは、実践の場で実感を伴った体験をし、その体験を肯定的にサポートする体制の重要性を指摘している<sup>20)</sup>。本研究においても、【経験を分かち合う風土】として、〔一緒に活動して見せていく〕こと、〔ものの見方を語り合い共有する〕こと、〔意味づけを深める問いかけ〕が重要とされ、日頃から〔活動について話し合う場を意識的に作る〕ことの必要性が挙げられた。水嶋<sup>21)</sup>は、公衆衛生専門職には経験学習力（コンピテンシーラーニング能力）が重要と述べており、今行っていることを自分の言葉で語ることを促し、体験の意味づけを深めることは経験を次につなげる力がつき、応用力を育てることにつながる。話を聴く時には、意図的な問いかけや合いの手、よい聴き手となることが求められる、答えをすぐに言わない、教えずぎない支援により、若い保健師を主役にし、先輩が黒子となることも必要なのではないだろうか。熟練保健師が『継承は上から下にする訳ではない』と述べているように相互作用であり、いい問いかけができる先輩は人を育てる力が高いであろう。

また、北海道市町村保健師係長職等を対象とした現

任教育の実態に関する調査<sup>22)</sup>では、係長職は現任教育の重要性を高く認識する一方で実施は困難と考える者の割合も高く、保健所に対する現任教育体制整備への支援要望が多くみられた。北海道では保健所と市町村が連携して現任教育の体制作りを推進しており、集合研修は保健所で行われることが多いが、研修に出して終わりではなく、新任者にどうだったかを問いかけることが重要と考える。保健師のベストプラクティスに関する調査<sup>23)</sup>では、保健師の専門性の継承には保健師が大切にする公共性を保健師自身にも貫き、組織内や組織を超えたつながりの場を確保し、互いに保健師活動のコアを確認し発展させる場が不可欠と述べている。今回のグループインタビューにおいても、熟練保健師が継承について語り合う中で、個人の力量だけでなく、育ち合う基盤を大切に、職場で【経験に分ち合う風土】の重要性が示唆された。さらに、本研究では、〔保健師の専門性が理解される職場環境〕の重要性も挙げられた。保健師と事務系職員の認識に関する研究<sup>24)</sup>において、保健師と事務職では保健指導に対する認識の違いは見られたものの、保健師の資質向上のための研鑽は事務職も重視していた。保健師同士と一緒に活動しながら育っていくことの意義が職場で認識され、現任教育の必要性が理解されることも継承を支える方策と考える。また、〔経験年数や力量に合わせた課題を任せて見守る〕こと、〔力をつけていくプロセスで配置転換を生かす〕など保健師の配置の工夫や、〔統括的な役割を持つ保健師を職場に位置づける〕ことが【活動を継承する仕組みづくり】として求められることが明らかとなった。

現代における継承の課題として、地域に出ることが減っていくと保健師魂や専門性が見出せなくなっていくことが危惧される。住民の生活は時代背景に影響を受けることから、保健師活動は歴史や時代背景と親和性のある仕事と捉えられる。その人の生き様を見せてもらうこと、生涯に寄り添うということは、その時代をどのように過ごし生きてきたのかを知ることの大切さを示している。また、時代のニーズに応えながら、保健師活動の中で失くしてはならないものと変えていく必要があることを見極める力が求められる。

岡山県では保健師活動伝承事例集<sup>25)</sup>が発刊された。その地域に根差した活動を記録に残し後世に伝えていくことの意義は大きい。活動の成果を住民にフィードバックするとともに、〔保健師活動の歴史を形として残していく〕ことが地域の健康づくりの歴史を引き継ぎ発展させていくための、地域住民の健康を守る専門職としての責務と考える。保健師活動の歴史はまちとともに、住民とともにあるのだということを忘れてはならない。

### 3 研究の限界と今後の課題

本研究は1か所におけるグループインタビューのため、対象地域を広げて継続していく予定である。また、今後の課題として、熟練保健師から活動を受け継いでいる次世代の中堅保健師の認識や思いも明らかにし、継承のあり方に検討を加える必要があると考える。

### 謝 辞

本研究に快く御協力いただいたA保健所管内の熟練保健師の皆様、御協力くださった方々に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、第3回日本公衆衛生看護学会(2015年1月神戸市)における発表をもとに加筆修正を加えたものである。

### 文 献

- 1) 奥山則子, 島田美喜, 平野かよ子編. ふみしめて七十年—老人保健法施行後約30年間の激動の時代を支えた保健師活動の足跡. 日本公衆衛生協会, 2013; 10-15.
- 2) 平野かよ子. 保健師の2007年問題に関する検討会報告書. 日本公衆衛生協会, 2007; 1-10.
- 3) 湯浅資之, 池野多美子, 請井繁樹. 現任保健師が認識している公衆衛生における現状変化とその改善策に関する質的研究. 日本公衆衛生雑誌2011; 58 (2): 116-128.
- 4) 日本看護協会. 保健師活動指針活用ガイド. 2014; 10-11
- 5) 松本亜由美, 川名部美代子, 山口ふじ子, 他. 保健師の分散配置を越えた連携の必要性和統括的な立場の保健師の役割. 保健師ジャーナル2013; 69 (2): 130-138.
- 6) 日本看護協会. 平成26年度保健師の活動基盤に関する基礎調査報告書(平成26年度厚生労働省先駆的保健活動交流推進事業). 2014; 16-17.
- 7) 嶋津多恵子, 蔭山正子, 星田ゆかり, 他. へき地における戦後から高度経済成長期までの保健師活動—土地の文化に對峙し住民の命と生活を守る—. 日本地域看護学会誌2010; 12 (2): 22-28.
- 8) 田中美延里, 小野ミツ, 小西美智子. 先駆的な公衆衛生看護活動を展開した保健師のキャリア発達—離島の町の保健師のライフヒストリーから—. 広島大学保健学ジャーナル2005; 5 (1): 16-27.
- 9) 佐藤順子. 保健師活動における「健康問題」の解明—技術の継承に関する基礎的研究. 湘南短期大学紀要2011; 22: 39-48.
- 10) 川崎道子, 永吉ルリ子, 牧内忍, 他. 沖縄県における保健師駐在制のメリット・デメリットおよび継承すべき

- 能力. 沖縄県立看護大学紀要2012;13:39-48.
- 11) 安梅勅江. ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法-科学的根拠に基づく質的研究法の展開. 医歯薬出版株式会社, 東京, 2001:5-7.
  - 12) グレック美鈴, 麻原きよみ, 横山美江編著. よくわかる質的研究の進め方・まとめ方-看護研究のエキスパートをめざして-. 医歯薬出版株式会社, 東京, 2008:54-72.
  - 13) 南裕子監訳. 質的研究の基礎-グラウンデッド・セオリーの技法と手順. 医学書院, 東京, 1999:55-203.
  - 14) 北海道保健福祉部. 北海道保健師現任教育マニュアル. 2006.
  - 15) 名原壽子. 公衆衛生看護の領域と専門性. 地域保健 1992;23(5):60-63.
  - 16) 前掲書15):63.
  - 17) 宮崎紀枝. 「魂」の熱さはなぜ重要? パッションはアクションの駆動力になる!. 保健師ジャーナル2012;68(1):8-12.
  - 18) 平野かよ子. 日本の保健師のあゆみ. からだの科学増刊これからの保健師2006:22-27.
  - 19) 藤井智子, 杉山さちよ, 北村久美子. 学士課程卒業後1年目保健師の語らいからみえた活動の実態. 旭川医科大学研究フォーラム2011;12:24-41.
  - 20) 佐伯和子, 和泉比佐子, 宇座美代子, 他. 行政に働く保健師の専門職遂行能力の発達-経験年数群別の比較-. 日本地域看護学会誌2004;7(1):16-22.
  - 21) 水嶋春朔. 公衆衛生専門職のコンピテンシー. からだの科学増刊これからの保健師2006:158-163.
  - 22) 立花八寿子, 玉井綾子. 北海道内市町村保健師職係長等を対象とした現任教育の実態. 北海道公衆衛生学雑誌2010;24(2):36-38.
  - 23) 日本公衆衛生協会. 保健師のベストプラクティスの明確化とその推進方策に関する検討会報告書(平成19年度地域保健総合推進事業). 2007:35-36.
  - 24) 平野美千代, 佐伯和子. 行政機関で行う保健指導に対する保健師と事務系職員の認識の比較. 日本地域看護学会誌2008;10(2):101-107.
  - 25) 全国保健師長会. 保健師の継承語り-晴れの国おokayamaから-. ふくろう出版, 岡山, 2012:3.